

批評的であるということが、あらゆる前提をまずは疑ってみることであるとするならば（この定義自体にリベラル左派的なおいがするという事は措くとして）、武藤・宮本両先生をお招きして行われた合評会とその後にいただいたコメントは、非常に批評的であったと感じている。

武藤先生の（『愛と戦いのイギリス文学史 1951-2010年』での）言葉を借りれば、すべてを「ぐにゃぐにゃ」にしてみせることであろうし、宮本先生のコメントの言葉を借りれば、どうしてもなくグローバリゼーションと新自由主義の現在にまみれた、私たちの研究の現在に立脚しつつ、その現在性の系譜を遡行することである。武藤先生の「文化左翼」という「挑発」も、まさに文化と社会の分断が極まったポスト社会主義的な現在の諸前提を、いかにして理解し切り崩すのか、という問題提起であったと受けとっている。

私自身は、この最後の問題について、まさにその「文化」とは何か、という切り口から考えていくつもりである。その場合の文化とは、全体性の思考を強いるようなものとしての文化である。つまり、たとえば『ハワーズ・エンド』という文学作品（「文化的製作物」）を論じるためには、帝国主義やエネルギーの転換の問題を考える必要がある、ということとは、歴史的還元主義ではないし、奇をてらった批評的ポーズなどではもちろんない。ある文学作品が、歴史の全体性の一部をなしているなら（どうしてなしていないと言えるのか）、たとえば『ハワーズ・エンド』とガソリンへのエネルギー転換が無関係なわけではない（この場合、エネルギー転換が「全体」なわけではなく、それも全体の一部である）。特定の文学作品を論じるためには社会の全体性を思考しなければならない、というのは、非常に常識的な論理的帰結であるはずだ。「文化」という言葉は、その全体性を表す言葉にもなり得る。

だが、そのことは驚くほど共有されていない。ひとつには、それが単に難しいということもあろう。私がそれをうまくやっているなどとは主張しない。だがそれ以上に、私たちの研究とは、個人による《至芸》としての研究の完成度・無謬度を評価しあう場であるという前提から、私たちが逃れられない点に大きな問題があるのだと思う。合評会が建設的になることの難しさも同じ根を持っている。そこから逃れるためには、集団的な研究の可能性を追求することが必要であろう。個人の《至芸》を披瀝しあい、品評しあう場ではなく、私たちが共有する問題を集団的に解決するための研究の場。青臭い夢だと思われるだろうが、私は今回の特集と合評会にそのような場の萌芽を見たい。